

名人
柴田鍊三



光風社版

昭和三十八年七月二十日 印刷
昭和三十八年七月三十一日 発行

定価 四〇〇円

著者 柴田 鍊三郎

発行者 豊島 清史

印刷者 菅生 定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京(廻)〇二三八番
振替 東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

名人

五

助六一代

七三

平山行藏

一〇一

戦国武士

一二九

花は桜木

一五九

装幀

三井永一

名人



わしは、弘化三年十月十八日、備前岡山城下之町の古ぼけた刀屋の中二階で、生れた。英雄豪傑が、生誕するような前ぶれをやったわけではない。

なんとなく、母親の腹がふくれて、生れ出たにすぎぬ。三歳頃までは、むやみに泣きさけぶ餓鬼であつたようだ。わし自身の記憶にはない。

父親も母親も、好人物であつたが、祖母が足輕の家の出のくせに、武家作法をことごとく身につけたような顔をして、せっせと、わしを教育してくれた。教育というよりも、折檻と云った方が正しかろう。祖母を思い出すことは、土蔵を思い出すことである。三日に一度は、窮命のために、土蔵へ突き込まれた。戸前に、がちやりと錠がおろされる——あの音が、今

でも耳の底にある。

左様、大いに腕白小僧であった。

八歳。熟すまでは登ってはならぬ、と祖母から厳禁されていた柿の木にのぼって、あやまって、足をふみすべらせて、落ちた。

悶絶したが、あたりに人影はなかった。息をふきかえした瞬間、股間から衝きあげて来る激痛に、思わず、野良犬のように、ほえた。ちんぽが竹で串刺しにされていたのである。刀ときに使う簞さくらを作るために、こまかく割った竹をかわかしてあった——その筵むしろの上へ、落ちたのである。

おかげで、わしの一物は、成長するにつれて、いびつな形になった。それが、女子をよろこばせることになろうとは、八歳の餓鬼に予想できる道理もない。

かけつけて来た母親は、腰を抜かしたが、祖母が泰然として、竹をさっと抜きとつてくれたのは、流石さすがであった。

寺子屋に通いはじめたが、帰って来た時は常に墨まみれであった。文字通り、飯よりも喧嘩が好きであった。

某日、父親が出入りしている御家老伊木三猿齋殿の外孫にあたる馬廻り役の伴と乱闘して、額をぶち割ってくれた。その伴は、わしより四つも年長であり、日頃腕力を自慢して居ったので、勝って意気揚々として、家へ帰った。その結果、激怒した父親に、えりくびをひん擡まれて、土蔵へぶち込まれた。父親に、土蔵へ入れられたのは、はじめてであった。

翌日、父親は、わしをつれて、御家老邸へ詫びに行った。

伊木三猿齋殿は、陪臣なまが乍ら禄高三万石、執政の首座として、小藩の大名も及ばぬ勢力を有っていた。名は忠澄、長門と称した。三猿齋はその号で、六十に近かったが、壮者をしのぐ鬢かみしやく鏢びょうぶりで、池田藩勤王の中心人物であったそうな。

古武士の風格は、面つらだけで、實際は話せる風流人で、美術を愛し、茶道の奥義おくぎをきわめ、自ら手づくねの茶碗など焼いていたらしい。

父親は、わしを下座に据えて、頭を下げさせようとしたが、わしは、起上り小法師のように、いくら頭を押しつけられても、また、むくつと抬もたげてやった。

「ほう、なかなか負けぬ気のわっぱとみえるの」

三猿齋殿が、笑った。わしは、大声で、

「御家老様、喧嘩は両成敗ときいとなりますがな。わしだけ頭を下げるのは、なんぼうにも、
癪じゃあが！」

と、云ってやった。

「そうであつたな。頭を下げずともよいぞ。何歳になる！」

「十二ですら」

「昨日一日、土蔵にとじこめられていたそうだが、泣かなんだか？」

わしは、そう問われて、にやつとすると、父親が狼狽するのをしりめにかけて、するすると、進み寄つて、

「これを作りましたぞな」

と、懷中から、鬼の面を木彫りにした根附ねつけをとり出して、さし出してやった。三猿齋殿は、掌にのせて、眺めたが、

「まことに、お前が作ったのか？」

「うん、作りましたぞな」

「藤五郎、お前は、途方もない件を持ったの」

父親は、御家老から、根附を渡されて、怪訝^{けげん}そうに首をひねった。どうにも、もてあましている腕白餓鬼に、こんな特技があるうなどは、納得しかねた風であった。

三猿齋殿は、わしが金彫りもやりたい、と申出ると、地金をくれる故、目貫^{めぬき}を彫ってみるがよい、と云ってくれた。わしが、ぶつとりと、喧嘩を止めたのは、その日からであった。

出来上った目貫を、わしは一人で、御家老邸へ持参した。三猿齋殿は、一瞥して、

「うむ、見事な出来ばえだ」

と、ほめてくれたが、わしは、かぶりを振って、

「駄刀^{だたな}で彫りましたから、氣に入りませんのじゃ」

と、こたえた。

「刀の良い悪いが、もうお前にも判るか？」

「判りますらあ」

「よし。では、日本一の名刀を、お前に観せてつかわす」

「ほんまかな？」

わしは、胸がおどった。

三猿齋殿が、わしをつれて行ったのは、仲買町の大分限者、河本立軒という旧家であった。途すがら、三猿齋殿は、それが、どんな名刀であるか、説明してくれた。

岡山城下に、最も旧家であることを誇る家が、二軒ある。児島町の天野家と、仲買町の河本家であった。

天野家には、家宝として、名刀藤四郎吉光があり、虫干の日には、これを観る者が蟬集した。競争相手の河本家の当主立軒は、これがくやくくてたまらず、如何な手段をとつても、藤四郎吉光を手に入れたいと念願した。

もとより、地方に、そのような名刀がある筈もなかった。河本立軒は、ある年、江戸へ出て、本阿弥家へ行き、代金をいとわずに求めたい、と依頼した。本阿弥家から、通報があったのは、それから五年後であった。

出て来たのは「骨食藤四郎」と、名物帳に記載されている吉光在銘の短剣であった。

本阿弥の手紙には、吉光の短剣は、三百両前後が相場であるが、この「骨食藤四郎」は、はじめ千利休が所持し、のち木村長門守重成の佩刀となった名品で、利休が製った金欄織込みの錦袋に納めてあり、折紙も由来書もまさしく真物である故、千両という高値であるが、

いかかであろうか、と問い合せてあった。

立軒は、狂喜して、即座に、千両で買うことにした。天野家の家宝は、吉光在銘だが、べつに、名物帳に載っていたわけではなかったのである。

藩主池田家には、天下の名作として三振があった。「大包平^{かねひら}」と「毛利藤四郎」と「浮田志津」であった。

当時、諸国古鍛冶の上々作といえ、藤四郎吉光、五郎入道正宗、郷義弘、三条小鍛冶宗近、という順序であった。

河本立軒は、藩主が所持する「毛利藤四郎」と比肩する「骨食藤四郎」を入手したわけであった。

三猿齋殿は、すでに、その名作を覗いていた。

わしは、刀屋に生れて、刀の中で育った小件であった。河本家の座敷で、その白刃を、持たされた時、思わず知らず、手が顫えた。後年、わしは、日誌に「その結構なること骨髓に徹し、未だ曾て忘るることなし」と書いた。

わしは、自慢たらしいことは、云いたくない。しかし、やったことを、かくす必要もあるまい。

わしは、日本一の刀工になってやろうと、ほぞをきめると、まず、剣技をみがくことと、鑑定に精を出すことにした。わしが入門したのは、直心影流阿部右源次殿の道場であった。

阿部右源次殿は、江戸浅草の生れで、長沼庄兵衛の高弟であった。当時、各流の代表者――鏡心明智流の桃井春藏、神道無念流の斎藤歡之助、北辰一刀流の千葉栄次郎などとともに、並び称された麒麟児であった。

直心影流は、心気を神に近い境に置く流儀である。十二三歳の小僧が、よくその境に入るわけもない。わしは、常に、一撃で、撃ち倒されて、しばらくは死んだようになっていた。師は、小僧と雖も、決して容赦をしてくれなかった。

剣を学ぶかたわら、弓術も砲術も柔術も学んでやった。

わしは、兵法を学ぶうちに、日本一の刀工になるには、真剣勝負をして、生きた人間を――